

『朝鮮古蹟図譜』全十五冊において紹介されている。

### ⑨ 林美雲死去

明治四十五年七月二十九日、本校彫刻科助教林美雲が肋膜炎により死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄に略歴紹介と追悼の記事が、また同第三号に肖像の写真が掲載されている。美雲は文久二年江戸浅草生まれ。旧名西牧正八。高村東雲、光雲に師事し、明治二十四年本校雇となり、同二十八年から三十年まで京都市美術工芸学校に勤務。三十一年本校助教となり光雲のもとで木彫の指導にあたっていた。

### ⑩ 狩野友信死去

明治四十五年七月十五日、本校創立に尽くし、本校絵画科助教をつとめた狩野友信が中風症により死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄にその経歴紹介と追悼の記事が掲載されている。なお、同誌第十巻第九号によれば、同年六月二日、知己門人二百余名が巣鴨町妙義坂上の丹波（敬三）葉学博士宅で友信の古稀祝賀会を開いたばかりであった。遺骸は染井墓地に葬られたが、大正三年三月一日に至り知己や教え子たちによって狩野家歴代の墓所である池上本門寺に墓碑が建てられた。表面の字は今泉雄作の書により、裏面は正木直彦撰文、屋代晁江書により高仙鶴が刻んだ（『故狩野友信先生墓碑建立報告』大正三年三月）。

### ⑪ 西郷孤月死去

大正元年八月三十一日、もと本校絵画科助教であった西郷孤月が死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄に略歴の紹介と追悼の記事が掲載されている。孤月は明治三十一年日本美術院創立に加わり、雅邦の娘と結婚（翌年頃離婚）したが、同三十六年頃から放浪生活に入り、大正元年台北滞在中に発病し東京に帰って死去した。四十歳であった。近年、郷里の長野県下を中心に遺作の発掘が進み、展覧会が開かれるなど、再評価の試みがなされ、それらを集約したかたちで昭和五十八年に山川武・菱田春夫編『西郷孤月画集』が信濃毎日新聞社により発行された。

### ⑫ ラグーン採用の可否

大正元年十一月三十日、文部省大臣官房秘書課長心得瀬戸虎記より正木直彦校長に対してヴィンツェンツォ・ラグーン採用の可否について照会があった。本書第一巻で触れたように、ラグーンは明治九年から同十五年まで工部美術学校彫刻科教師をつとめた後、清原玉らを伴ってイタリアに帰り、パレルモ市に工芸学校を開設して校長となった。同校は間もなく市立高等美術工芸学校に昇格。清原玉は同地で正式に西洋画法を学び、同校の油絵教授となり、画家として名声を得た。明治二十二年にはラグーンと結婚し、エレオノラと改名している。帰国後三十年たち、ラグーン夫妻の日本への想いは止みがたく、大正元年九月二十七日、ラグーンは日伊両外務省を介して日本政府に再雇用を嘆願した。そのために本校に採用の可否が問われたのである。これに対して本校は「経費ノ都合上採用ノ見込無之候」と回答し、本件についてはこれで結着がつかないまま